

# ふたつのコンペについて

佐藤光彦



模型写真：新幹線ホームより西口広場のぞむ

## 熊本駅西口駅前広場設計競技【最優秀賞】

平成 23 年春の九州新幹線鹿児島ルート of 全線開業に向け、熊本駅およびその周辺エリアでは、大規模な再開発が進められています。熊本に行かれたことがある方なら、ご存じだと思いますが、商業や行政の中心部は熊本城から水前寺公園にかけてのエリアにあり、現在の駅周辺は、かなりさびれた状況にあります。そこで、陸の玄関口としての駅周辺の都市機能向上をはかり、新幹線開業による経済的効果を最大限に波及させるための事業が展開されているのです。その一環として西口駅前広場が計画されています。現在、駅の西側には出口さえなく(!)、倉庫や住宅が建ち並んでいます。整備計画の中で東口が「九州・熊本の情報発信の場」とされているのに対し、西口エリアは「新しい都市生活を創造する場」として位置づけられており、駅前の商業施設以外は主に住宅地となります。広場の規模もそれほど大きくなく、よく地方駅に見られるタイプの広場として計画されていました。

私たちの案は、205 点の応募案から 1 次審査で 5 点の中に残り、5 月 10 日の公開 2 次審査で最優秀賞に選ばれました。ちなみに、東口駅前広場の設計者は、昨年末の指名コンペで西沢立衛氏に決定しており、駅舎の設計は安藤忠雄氏に委託されているそうです。

また、この設計競技は、熊本県が推進する「くまもとアートポリス」の参加事業として実施されています。「アートポリス」とは、1988 年に当時の細川知事（後の首相）が、磯崎新氏をコミッショナーに迎え、後世に残り得る文化的資産の創造と地域の活性化を目指して始めた事業で、

県内の主要な公共施設（一部民間施設も含む）の設計を県内外の優れた建築家に委託するというものです（通常、公共建築の設計者は「設計入札」で決まります）。現在までに 70 以上の施設が完成しています。このような事業は他の地域でも試みられましたが、20 年も持続している例はなく、国内のみならず海外からも注目されているプロジェクトです。

私たちの提案は、駅前広場を、コンコースから連続した「半屋外の公園」のような場所にして、駅と街、建築と都市をつなぐ空間とすることです。

このコンペのために、あらためて規模の似た駅前広場を見てみましたが、どれもが同じような印象しか残りませんでした。つまり、中央に巨大なロータリーがあり、バスやタクシーが待機し、周囲をさまざまな商業施設が取り囲んでいる、という様相が駅前広場の印象を決定しているのです。狭い歩道部分に置かれるシェルターや植栽がどんなにデザインされていても、ほとんど影響がありません。また、駅のコンコースを出ると、突然そのような雑然とした風景の中に、ボンと放り込まれるような状況も気になりました。

そこで、私たちは車道と歩道の境に、たくさんの穴（バスやタクシーの乗降口を含む）の空いたスクリーンを立て、芝生のマウンドやさまざまな植栽を計画し、雨に濡れずに目的地まで行けるように動線上にルーフを設けることで、半分囲われた公園のような、人々が楽しく滞在し、行き交うことができるスペースをつくり、駅と街を緩やかに連続させることを考えました。また、駅前広場とは



模型写真：俯瞰



パース：コンコース出口より見る

交通広場ですから、人々を効率よく誘導するためのサイン計画が重要です。誰が見ても分かりやすいように、これらをスクリーン上に大きく表示しました。つまり、誘導サインやシェルター、乗り場案内、時計、ガードレールといった駅前広場に必要な要素を、「スクリーン」と「ルーフ」に集約しながら、新しい空間として駅前広場を再構成したのです。このスクリーンは、周囲に建ち並ぶであろうさまざまな商業建築のデザインを調停するための前景となることも期待しています。ロータリー側は黒くしていますが、これは市民に愛されている熊本城の黒壁を多少意識したものです。

共同設計者として、構造計画を齋藤研 OB の小西泰孝さんに、植栽計画を山崎誠子先生に、照明計画を吉田研 OB の角館政英さんをお願いしています。

3年後の完成を目指して、市民の皆さんに親しまれる、これまでにない駅前広場が実現できるように、頑張りたいと思います（コンペ案の詳細については、『GA JAPAN 93号』に掲載されていますので、興味のある方はそちらもご覧ください）。

### 澄心寺庫裏デザインコンペティション【入賞】

信州伊那盆地にある禅宗（曹洞宗）の寺、澄心寺ちゅうしんじの庫裏くり（お寺の居住部分）とその周辺のランドスケープについてのコンペです。小さなお寺がコンペを行うのは珍しいことですが、新住職の就任に際し、境内全体を21世紀の「共（コモン）」のプラットフォームとして再生することが目指されていました。かつては地域の文化的、精神的な中心であった寺の存在を新しい形で復活させること、居住部分のプライバシーを確保しつつ、人々が気軽に立ち寄れるような場所を併せもつことが求められました。

こちらのコンペは、研究室の大学院生が中心になって

進めました。私たちの提案は、プライバシーの高い寝室などの部屋をボックス状にして分散して配置し、その間にリビングや食堂などの機能を割り当て、美しい盆地の風景を望む道路側をコモンスペースとし、少し中心をずらした木造寄棟の大屋根で覆うというものです。大きな屋根が地面から少し浮いて、その奥に大小の箱が並んでいるような姿はつとうになっています。このような構成とすることによって、法堂、客殿から連なる伽藍の風景を拡張し、コモンスペースと居住部分を緩やかに分節しながら共存させ、周囲の自然に開きながら、信州の厳しい冬の気候にも耐え得る新しい庫裏のあり方を考えました。ランドスケープでは、桜の並木道をつくるなど、季節ごとに人々が集えるような植栽を計画し、庫裏の面する四つの方向では、それぞれ異なったしつらえの庭が見えるようにしました。

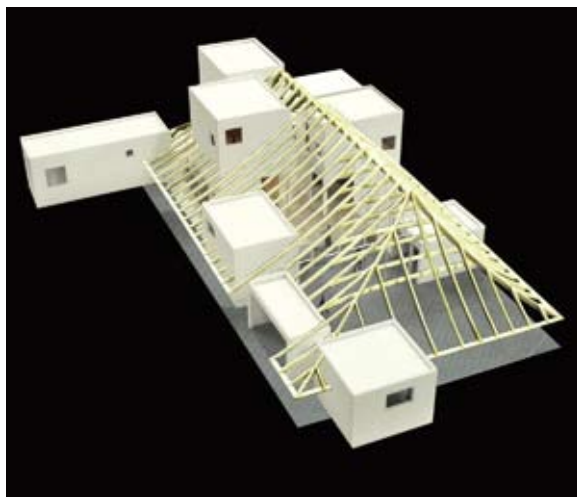
こちらも、構造設計を小西さんに、植栽計画を山崎先生をお願いしています。また、禅宗様の建築について、重枝先生よりレクチャーと貴重なアドバイスをいただきました（今回ほど建築史の話が身にしみてリアルに感じられたことはありませんでした。学生の皆さん、歴史は大事ですよ!）。

澄心寺は残念ながら入賞まででしたが、大変良い勉強になったと思います。ふたつのコンペは、3月から5月にかけてほぼ同じスケジュールで進行し、特に2次審査では、熊本の1週間後に澄心寺というハードなものでした。コンペに関わった人数は、共同設計者や、事務所の所員、研究室や手伝ってくれた学生を含め40名にのぼり、建築は一人ではできない共同作業であることを、あらためて感じる機会にもなりました。これからも、積極的に実施コンペに挑戦していくつもりです。

（さとうみつこ・准教授）



立面図：右端の建物が提案部分



構造模型